

第1回

きしめん

誰にでもある

逆むけ

のこと

前編



中央新幹線は東京圏、名古屋圏、関西圏を高速かつ安定的に結ぶことを目的として、全国新幹線鉄道整備法に基づき一九七三年に基本計画が定められた路線である。

特徴的なのは超電導リニア方式を採用したことだった。車輪を使わず超伝導電磁石により浮力と推進力を得るもので、最高設計速度は毎時五〇五キロメートル。東海道新幹線の最高速度が毎時二八五キロメートルだから、その違いは歴然だろう。現在、二〇二七年に品川～名古屋間を開業させることを目標に工事が始まっている。完成すれば東京と名古屋は四十分ほどで行き来できることになる。

新たな新幹線の誕生は、名古屋を大きく変貌へんぼうさせると考えられている。その中心となるのは新たに駅が作られる名古屋駅西地区だ。駅東と違いこれまででは超高層ビルの建造もなく、どちらかとい

うと時代の流れに取り残され気味だったこの地域が、新たな開発の中心となる。駅の建物だけでなく周囲に防災も兼ねた緑の広場が作られることになり、用地買収によって既存の建物は取り壊され、町の姿は大きく変わることになる。

とはいえ、二〇一七年の秋現在、まだ目立った変化は起きていない。駅の西にあるたいこうとわり太閤通口を出てしばらく歩けば、相変わらずの風景が広がる。目立つのは居酒屋かラーメン店くらいで、あとは古くからある店舗、すでに閉めてしまった店舗、店舗を改装した住宅などがあるばかりだ。人通りも、それほど変わってはいない。

そんな中、やはり変わらずに営業を続けている一軒の店がある。

その名は喫茶ユトリロ。

ドアを開けると長年染み込んだコーヒーの香ばしい匂いと、にお明るい声が迎えてくれる。

「いらっしやい。おはよう」

常連だろうと一見いちげんの客だろうと、鏡味敦子かがみあつこは同じように声をかける。

「おはようさん」

そう応じて自分の定席さだまとして一階の一番奥に腰を下ろしたのは榊原清治さかきばらせいじ、昔は駅西で洋品店を営んでいたが、今は店じまいして警備員の仕事をしている。

「榊原さん、今日は遅かったね」

すかさず隣の席に座っている男女のうち、女性のほうが声をかけた。

「ああ、寝坊してまってな。敦子さん、時間がな  
いで急いで頼むわ」

「はいはい」

敦子は注文も聞かず、カウンターに向かった。

「モーニングひとつ」

呼びかけても奥の調理場に立つ鏡味正直まことは応じる言葉ひとつもない。ただ黙って食パンをトースターに入れ、焼き上がったトーストにバターを塗ると、ゆで玉子を添えて無言で差し出す。時間を見計らって敦子がポットから一人分のコーヒーを

カップに注ぎ、それをセットで持っていった。

「はい、おまちどおさま」

「お、ありがと」

榊原は早速コーヒーカップを手に取り、大袈裟おおげさにふうふう吹いてから一口啜りすず、

「……あー、美味いわ。やっぱりこの店のコーヒーが一番だわ」

「ありがとうね」

敦子は笑顔で礼を言い、その場から離れる。

「榊原さん、聞いた？ 坪内つぼうちさんのところ、来週引越すみたいだわ」

先程の女性が再び彼に話しかける。

「坪内さん？ あそこ、立ち退き区域に入っとったかな？」

「直接には入つとらんみたいだけど、なんか土地を売ってくれて言われたみたいだね。ほら、あそこもいろいろあったで」

「いろいろ？ 何が？」

「あったがね。ねえ」

と女性は向かいの席に座る夫に声をかける。し

かし彼は「ああ」とも「うう」とも取れない声を洩らただけで、アイスコーヒーのストローをくわえた。

夫の名前は岡田栄一、そしてお喋りな妻は美和子。営んでいた精肉店を畳んでからは悠々自適の生活をしている。

「坪内って、前にうどん屋やっとなつたところだろ」

無口な栄一の代わりに口を挟んできたのはもうひとつの席を占拠している竹内匠だった。

「前に火事を起こして店が焼けてまったんだな。

そんで奥さんが亡くなった」

「そうそう。それだて」

すかさず美和子が合いの手を入れる。

「それならよう覚えとるわ。なにせ焼けた家は俺んとこで建て直したでよ。もう店にせんでええと言われて、普通の住宅に建て替えたんだわ」

竹内は津田建築という会社の社長だ。

「あの火事のせいで坪内さん、えらい悄気てまつてな。店をやり直す気にもならんで、そのまま閉店してまったんだわ」

「そういうことがあったで、あんまりここに未練がないんかもねえ。だで早々に立ち退くんだけわ」

美和子がしみじみ、というには少しばかり大きな声で言った。

「坪内さんとこのうどん、美味しかったのにねえ。つゆのだしがいい匂いで」

「じぶんところで麺を打ったしな」

「そうそう。やっぱり手打ちがええわ」

頷いた後で、美和子は思い出したように、

「そういえばねえ、あの火事の前に妙なことがあったんだわ」

「妙なこと？ 何だ？」

「竹内が身を乗り出す。」

「じつはね」

と、美和子がいかけたとき、店の奥にあるドアが開いて、ひとりの青年が顔を出した。

「ばあちゃん、ひいばあちゃんが老眼鏡知らないかって」

「またかね。いつつもどこかに置いて忘れてくでね。昨日は……たしか箆筒の上に置いとったよ」

「そう」

青年は頷いて引っ込もうとする。そこへ、

「龍ちゃんとおる龍ちゃん。ちょうどええとこにきた」

美和子が手招きする。

「はい？」

青年——鏡味龍はドアを出て、店に入った。

「こっち座りゃあ。あんた、大学のほうはどう？」

「はあ……まあ、ぼちぼちです」

美和子の隣に座ることを指示され、いささか恐縮しながら彼は答えた。

「もう二年生でしょ。難しい勉強しとるの？」

「ええ、いろいろと」

「偉いねえ。あんた偉いわ」

感じ入るように美和子が言った。どうやら彼女は龍のことがかなり気に入っているようだった。

「あんた、頭がええもんねえ。家の前に手羽先の骨が捨てられとった事件も、あっさり解決してくれたし」

「いや、それは俺の力じゃなくて——」

「ほんと、賢い子はええわ。頼りになるもん。敦



子さんはほんと、ええお孫さんを持ったわな」

あけすけな褒めように、龍は首を竦めるしかなかった。

「そうそう、あんたにも聞いてもらわんと。そんなでまた謎解きしてみてちょうよ」

「謎解き？」

「今ちようど話しとった坪内さんとこのことだわ。知つとる？ 坪内さん」

「いえ」

「旦那さんが坪内達司さん。奥さんが房子さん。

ふたりで商店街から少し外れたところで『つぼうち屋』ってうどん屋さんをやとつたの。まあ仲のいい夫婦でね。子供はおらんかったけど、一生懸命働いとって、店も流行とつたよ。でもその店がねえ、火事で焼けてまったんだわ」

「それ、いつのことですか」

「えっとね、たしか……」

「東北で震災があった年だで、平成二十三年だわ」

竹内がまた口を挟んだ。

「俺が焼けた家を建て替えたったで、よお覚えとる。たしか秋だったな」

「平成二十三年……六年前ですな」

「もう、それくらいになるかねえ。つい最近のこ  
とみたいだったけどねえ」

感慨深げに美和子が言う。

「それで、謎って？ まさか出火の原因を探すんですか」

「ちゃうがね。それはたしかわかつたはず

……何だったかね？」

「調理場の火の不始末だわ」

と、竹内。

「なんか、坪内さんがそう言っとった」

「そうだったかね。まあええわ。わたしが気にし  
とるのはそういうことでないんだわ」

そう言って、美和子は龍に向き直る。

「坪内さんの店、ほんとに美味しかったんだよ。

うどんもきしめんも自分とこで手打ちしとってね。  
麺がしこしこで」

「きしめんの手打ちはええな。うどんもええけど、

きしめんは喉越のどこしが違うですよ」

榊原がしたり顔で言う。

「はあ……」

なかなか話が本筋に入らないので、龍は当惑するばかりだ。

「それで、謎というのは……?」

「そうそう。その坪内さんの店でね、たしか火事になる前の日だったと思うけど、きしめん食べようと思って行ったら臨時休業しとったんだわ。たしか『都合により休業いたします』とか店の前に張り出して。坪内さん具合でも悪うなったかなと気になって、裏手の勝手口に回ってみたんだわ。そしたらね」

間を置くように言葉を切り、

「勝手口の横に置いたったごみ箱にね、沢山ぎょうさんのきしめんが捨てられとったの」

「きしめんの麺が捨てられてたんですか」

「そう。もう茹ゆで上がとったのがそのまま。あれえ、と思ったときに勝手口が開いて、房子さんが出てきたんだわ。手にポリバケツを持つとって

ね、その中身をごみ箱にぶちまけたんだわ」

「もしかして、それもきしめんか」

榊原が訊くと、美和子は頷いた。

「茹でたてで湯気の立つとるきしめんだったわ。

何やつとるのって訊こうと思ったんだけどね、そのときの房子さんの顔がなんか……鬼みたいだね」

「鬼」

「きつ、と眉上げて口をへの字に曲げてね。あんまり怖い顔しとるで、声がかげられせんかったの。房子さんの生きとる姿を見たのは、あれが最後だったねえ」

「何があつたんかねえ」

竹内が首を捻る。

「あの奥さん、そんな怖い顔をするようなひとではなかったと思うが」

「だから気になるんだて。今でもあのときのことを、よう覚えとるもん。ねえ龍ちゃん、どう思う?」

「どう思うって……」

龍は当惑するしかなかった。

「その房子さんってひとに会ったこともないし、どうしてそんなことしたのか俺にもわからないですよ」

「わからんかね。そうかね。うーん……」

美和子は口を尖<sup>とが</sup>らせる。機嫌が悪くなったのはなく、どうしたらいいのか考えているようだった。龍は言った。

「本当に知りたいのなら、坪内さんのご主人に訊いてみたらどうですか」

「それはできんて。傷<sup>えぐ</sup>を抉<sup>えぐ</sup>るみたいで」

「まあ、そうだわな」

それまで黙っていた栄一が、ぼつりと言った。

「わからんことを、わからんままにするしかないときもあるて」

「なに、偉<sup>偉</sup>そうに」

美和子が不満顔で夫を見た。すると栄一はまた口を閉じ、氷だけになったアイスコーヒーをストローでずずずと啜<sup>すす</sup>った。

その翌日のこと。

東山キャンパスでの午前中の講義が早めに終わったので、龍は名大めいだい南部食堂に向かった。十二時を過ぎるととたんに混みだすので、今のうちに昼食を済ませておこうと考えたのだ。

ちなみに「名大」とは「名古屋大学」の略称である。音だけ聞くと「明大」すなわち明治大学と混同してしまいそうだが、名古屋の人間でそういう間違いを起こす人間はまずいない。逆に「明大」のことを話してもほぼ百パーセント「名大」のことだと誤解される。

さらにちなみに、名古屋の人間は「名古屋駅」のことも「名駅めいえき」と略す。これも他の地域の人間には耳慣れない言葉らしく、ときおり意思疎通を阻む要因となったりする。

閑話休題、食堂の二階に上がった龍は何を食べようかと陳列ケースの食品サンプルを眺めた。

眼に留まったのはきつねうどんだった。空腹具合からすると、今日はうどん一杯でもいい気がする。そう思ったとき、昨日のユトリ口でのやりとりを思い出した。

きしめん、かあ。

正直、龍はそれほど意識してきしめんを食べたことはなかった。選ぶとしたらうどんだった。だが今日は、少しだけ気がそえられる。この食堂ではうどんをきしめんに変えることもできるし。

「よし」

軽い決心をして、きつねきしめんを注文した。

熱々の井どんぶりをトレイに乗せ、まだ空席の目立つテーブルの隅に腰を下ろした。向かい側ではピンクのジャケットを着た女性が麺を啜っている。それもきしめんだった。食べながらテーブルに広げた手帳にメモを取っている。

偶然だな、と心の中で思い、箸はしを取った。

井に入っているのは二枚のあぶらげとほうれん草、そして刻みネギだけ。まずあぶらげを除よけて麺を引き上げる。白く平たい麺がちよっと目新し

い。そのまま口に運び、啜る。

お、と思った。うどんとはまるで食感が違う。薄く平たいので唇や舌の上を滑るとき、ぺたぺた、と踊るような感覚があるのだ。

なるほど、これがきしめんの特徴か。龍はそれを面白く感じた。すかさず次の麺を啜る。

美味しい。思わず頬ほおが緩んだ。

別に味付けされているあぶらげも、いいアクセントになっていた。なぜ入っているんだと不審に思ったほうれん草さえも、妙に馴染なじんでいるように味わえる。

つゆも悪くない。適度にだしの風味が効いている。きしめんを食べ終えた後、全部飲み干した。

「あー……」

思わず声が洩れる。顔を上げた。

眼が合ってしまった。

向かい側に座っていた女性がこちらをじっと見ているのだ。

まずい。完全に素の状態を見られてしまった。

龍は内心うろたえた。井を手にしたまま動けなく



なる。

女性はまだ、こちらを見つめている。なんだ、なんなんだ？ そんなに珍しい食べかたでもしていたのか。それとも気の緩んだアホ面が面白かったのか。でも女性は笑いもせず、ただ龍を見つめているだけだった。

龍のほうも彼女から視線を逸そらせなくなっていた。年齢は二十代半ばくらいだろうか。学生には見えない。助教か講師か。あるいは一般人かもしれない。この食堂は誰でも利用できるから学生以外の人間がいても珍しくはないが。

明るい栗色に染めた髪を襟足あたりでカットしている。ボブというやつだろうか。顔は卵のように丸みがあり、目鼻立ちははっきりとしている。細く赤いフレームの眼鏡をかけ、その奥の瞳ひとみはやはり龍をじっと見つめていた。

「あの……」

こちらから声をかけてみた。

「何か問題が——」

「お願いがあります」

言葉を遮って、彼女が言った。

「モデルになってください」

「……………は？」

言われている意味がわからず、思わず聞き返した。

「雑誌のモデルになってほしいんです」

彼女は名刺を差し出した。「NAGUYAを世界に発信するWebマガジン DAGANE！編集部 ひらのりお 平野里央」と記されている。

「……………ダガネ？」

「雑誌の名前です。『だがね』って言葉、聞いたことありません？」

「さあ……………名古屋弁ですか」

「はい、『である』みたいな断定の意味があるそうです。わたしも使ってるひとを見たことがないんで、ちょっと古い言葉だと思えますけど。あの、もしかして、名古屋のひとじゃないんですか」

「ええ、東京出身ですけど」

「東京かあ……………」

シヨックを受けたように彼女——平野里央は仰

け反<sup>ぞ</sup>った。

「どうかなあ……生粋の名古屋人のほうがいいのか……でも、捨てがたいしなあ」

しばらく、と言っても五秒ほど逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>した後、再び彼女は龍に向き合った。

「でも、名大の学生さんなんですよね？」

「はあ、まあ」

「なら東京出身でもかまいません。モデルになつてください」

「だから、そのモデルって、何の話ですか」

「名刺の裏にQRコードがありますよね？ それ、読み取ってください」

よくわからないが、言われるままスマホを取り出しQRコードを読み取ってみた。出てきたURLをタッチすると、Webサイトが表示された。

「それがうちの雑誌です。Webだけで展開します」

見た目はお洒落<sup>しゃれ</sup>な雰囲気だった。最新号の特集は「名古屋のファッション基地」とある。その他にも食べ物の情報とか美容院の記事なども掲載さ

れていた。どちらかというとな女性向けの雑誌のよ  
うだ。

「今度『DAGANE!』でわたし、連載を始め  
ることになりました。名古屋めしを一から見直そ  
うという企画です。題して『名古屋めし再発見』  
そのままのタイトルだな、と龍は思った。もち  
ろん口に出しては言わない。

「で、ただ名古屋めしを載せてあれこれ書くだけ  
のものにしたくないんです。もっと親しみやすく、  
もっと読者に興味を持ってもらえる記事にしたい。  
でもどうしたらいいのかわからない。考え続けて  
いたんですけど、ひとつアイディアが浮かびまし  
た。モデルを連れてきて毎回食べさせてみたらど  
うだろうと。その子が食べる姿を載せて、ついで  
にコメントも書かせたら受けるかもしれない。そ  
のためには見映えのいいイケメンがいいんじゃない  
かと思いました。だから『DAGANE!』で  
ときどき登場してもらっている地元モデルの子と  
打ち合わせしてみたんですけど……駄目でした」  
「駄目って、どうして？」

「なんかねえ、違うんですよ。一緒にひつまぶしとか味噌みそかつとか食べてみて、その食べっぷりを見てただけど、なんか違うんです。ピンとこない」

里央は髪をぐちゃぐちゃに搔かき上げる。そのときのもどかしさを表現しているようだ。

「それで悩んじゃって、行き詰まって、ここに来ました。ときどき母校の空気を吸って気分転換するんです、わたし」

「名古屋大学の出身なんですか」

「ええ、文学部ですけど。ちなみにあなたは？」

「あ、医学部ですけど」

「医学部！ いいなあ、それいい。ポイント高いです」

里央は急にはしゃぎだす。

「ともかく、ここに来て正解でした。あなたみたいな理想のモデルに出会えるなんて」

「あの、まだ俺、状況がよくわかってないんですけど」

龍は言った。

「なんで俺なんですか。俺、別にイケメンとかじゃないし」

「顔じゃないです」

里央は言下に応じた。

「……じゃあ、どうして？」

ちよつとだけ傷ついた心を隠して尋ねると、彼女は言った。

「わたし今まで、こんなに美味しそうにきしめんを食べるひと、見たことがないんです」

「なんかそれ、わかる」

ひとしきり大笑いした後、平井駿ひらいしゆんは言った。

「俺も前から思ってた。こいつ、ほんと何でも美味そうに食うよなって」

「そうかあ？」

龍は顔をしかめる。

「俺、普通に食べてるだけなんだけど」

「それだよ。素のおまえが面白いんだて」

「面白ってなあ」

やはり馬鹿にされたような気がして、面白くなかった。

「明壁あすかべさんだっておまえのこと『食べる』ところを見てると気持ちいいくらい』って言ってたし」

「明壁さんまで……」

「その編集者、だっけ、結構ひとを見る眼があると思う」

「食いっぷりばかり褒められてもなあ」

「納得いかないか。やっぱり顔で選ばれたいか」

「そういうわけじゃないけど……」

「でもな、おまえに声をかけてきたのは顔もファッションとしてあると思うぞ。まるで見映えのしない男だったら、いくら美味そうに食べるからってモデルに誘おうなんて思わないだろう」

「でも、『顔じゃないです』って断言されたぞ」

「そりゃ顔が第一義ではないってだけだ。おまえさあ、自分で気付いてないみたいだけど、そんなに悪くないぞ。なんていうか……ほら、ああ、思い出せない。おまえの顔を一言で言い表せる言葉があったはずなんだが……」

駿は頭を掻きながら考えていたが、

「そう、人好きのする顔。それだ」

「何それ」

「だから、誰にでも好かれる顔ってことだよ」

誉め言葉だろうか。まあ、誉め言葉なんだろうほなあ、と龍は心の中で割り切る。

「それより龍、その編集者の話、受けたのか」

「受けたっていうか、受けさせられたっていうか



……」

「押し切られたのか」

「明日の夜、一緒にきしめん食べに行くことになった」

「デートじゃん。きしめんデート」

また駿が笑った。

そのとき、講義室に講師が入ってきた。これから基礎医学の講義を受ける。

ちなみに彼らが現在いるのは名古屋大学鶴舞キャンパスだった。こちらには医学部と附属病院があり、二年になると大学本部のある東山キャンパスだけでなく、こちらで講義を受けることが多いなる。

講義の最中、龍は熱心にノートを取った。教えられることのレベルも上がってきて、うっかりすると置いていかれそうになる。駿も同じようにノートを取っているように見えたが、ふと覗いてみると講師の似顔絵を描いていた。龍が見たことに気付くと、彼はにやりと笑ってみせた。

余裕だな、と龍は感心する。一年のときと違っ

て解剖実習などが始まって学ぶべきことのレベルはかなり高度になってくる。龍はときどき自分ではついていけなくなるのではと心配になってくるほどだが、駿は文字どおり鼻唄はなうたまじりでこなしている。頭の出来が違うのだろうか。

部活でも彼は活躍しているようだ。そのせいで一年のときほど顔を合せる時間は多くないが、それでもこうして講義などで一緒になるときは親しく話しかけてくる。部活にも誘われたが、それは断った。部活で上級生と顔見知りになっておくと将来の就職にも繋つながると言われたが、高校時代に部活であまりいい思い出がなかったので、積極的かかに関わる気になれなかったのだ。

結局、と龍は思う。結局俺は、いまだにこの大  
学に慣れていないのだな。

講義の単調な声が聞こえてくる。その言葉の意味を掴つかみ取ろうとしながら、どこかで意識が離れがちな自分を、龍は苦々しく思っていた。

地下鉄上<sup>かみ</sup>前<sup>まえ</sup>津<sup>つ</sup>駅の改札口で待ちあわせた。

「すみません、遅れちゃって」

mana<sup>マ</sup>ca<sup>ナ</sup>で滑るように自動改札を通過し、平野里央は飛び出してきた。今日もピンクのジャケットを羽織っているが、先日のものとは少しデザインが違う。肩から大きなトートバッグを掛けている。

「出掛けにキャロちゃんがトイレの掃除をしろつて言うんで」

「キャロちゃん？」

「猫です。サバトラの女の子。かわいいんですよ。写真見ます？」

「あ、後でいいです。お店に行きましょう。近くなんですか」

「ええ、歩いてすぐです」

里央が言うとおおり、その店は駅から歩いて五分ほどのところにあった。入り口右手に食品サンプル

ルの棚、左手には大きな狸たぬきの置物。そして入り口の暖簾のれんには「丸一」の文字がある。

入ってみると中はテーブル席と座敷席がある。見たところ、ごく普通のうどん屋だった。ただひとつ違ったところは店内の一角に麺を打つブースのようなコーナーがあり、そこに「名古屋手打研究会」と書かれた看板が掛けられていることだった。

里央は店の奥に行き、なにやら挨拶あいさつをしている。どうやら今日ここで取材することはあらかじめ了解を得ているようだ。まあ当然だな、と龍は思う。

「ではこちらへ」

一番奥のテーブル席に座らされた。

「ここは麺を手打ちしているんですか」

龍が尋ねると、

「そうなんです。手打ちのきしめん、食べたことありますか?」

「多分、ないと思います。普通の麺と違うんですか」

「それは自分の舌で確かめてください」

店員が注文を取りにくる。当然きしめんだけを頼むと思っていたら、

「桜天きしめんをふたつ」

里央は言った。

じつは龍も通常のメニューとは別にある「揚げたて桜えび」の文字が躍るメニューが気になっていた。「桜天きしめん」はそこに書かれていた。

「桜天きしめんって桜海老さくらえびの天ぷらが付くんですか」

「そうです。ここは手打ち麺と同じく、桜海老のかき揚げも名物なんです。きしめんの記事には余分なものですが、ここは是非とも食べてもらいたくて」

桜海老のかき揚げかあ。龍はすでに口の中で唾だ液腺えきせんが活性化しはじめていることを自覚した。どんな味なんだろう。

「鏡味さん、あなたはきしめんにどんなイメージを持っていますか」

彼の夢を破るように、里央が尋ねてきた。

「きしめんのイメージ、ですか。うーん……名古

屋名物？」

「そうです。名古屋の名物は、と訊けば真っ先にきしめんの名前があがる。とろろできしめん、好きですか」

「それは……どうかなあ。学食で食べたのも、すごく久しぶりだったし」

「あまり馴染みがない？」

「……正直に言えば」

おずおずと言うと、里央は納得したように頷く。

「そうなんです。きしめんは名物なのに、あまり馴染みがない。というか、当たり前すぎてわざわざあれこれ言うこともない。それが現状なんです。でも、わたしはそれに異を唱えたい」

勢い込んだ表情で、彼女は言った。

「きしめんを名古屋めの代表として、はつきりとその存在を主張したいんです。わたしが『名古屋めし再発見』という連載企画を立ち上げたそもその動機も、それなんです」

「……ずいぶんときしめんに感情移入してるんですね」

龍が言うと、里央は、はっ、とした表情を見せた。ちよつと言い過ぎただろうかと龍が後悔している、

「感情移入……そうかもしれませぬ」

里央は少しだけトーンダウンした。

「わたし、自分の好きなものに入れ込みすぎちゃうんですよね。ときどき突っ走ってしまふ」

「そんなにきしめんのことが好きなんですか」

「好きです。でもそれは味とか喉越しとか、そういうものだけじゃなくて——」

その言葉の最中に、注文したものが運ばれてきた。

きしめんの井の横に、白い紙を敷いた器がある。その器に載せられているのは、薄桜色のこんもりとしたかき揚げだった。

「これは……なかなかのインパクトですね」

龍の言葉に、

「でしょ」

里央は我が事のように微笑<sup>ほほえ</sup>む。

「でも、まずはきしめんを食べてみてください」

そう言われ、箸を取った。

あらためてきしめんを見る。名大のものは透明に近いつゆだったが、こちらはもっと濃い色をしている。湯気と共にだしの香りが立ちのぼっていた。

「名古屋の麺のつゆには二種類あります。つまり醤油しょうゆベースの赤と、白醤油ベースの白。ここは赤ですね。同じ店でもメニューによって赤と白を使い分けているところもあります」

里央が解説した。なるほど、では名大のきしめんは白だったのか。

麺の上に載っているのは赤い縁取りのある蒲鉾かまぼこと、あぶらげ、わかめ、そして花かつお。

箸で平たい麺を引き上げてみて、お、と思った。麺に艶やかな光沢があるのだ。これが手打ち麺というものなのか。さっそく口に運んでみる。

啜ると、例のぺたぺたという感触が唇と口内に伝わった。噛かんでみる。手打ちということなので讃岐うどんのような腰のある噛み応えごたを予想していたが、それほどでもなかった。一瞬裏切られ



たような気がしたが、続けて啜るうちに違いがわかった。たしかに学食のきしめんより力がある。しかも麺につゆの香りと味わいがしつかりとまとわりついていた。

これ、美味しい。

思わず続けて啜ってしまう。あぶらげも上品な味付けだったし、わかめも良いアクセントだった。これはどんどん食べられる。箸が止まらなかった。「いいですねえ」

里央の声に我に返った。見ると彼女はミラーレス一眼カメラを構えていた。いつの間にか写真を撮られていたのだ。

「やっぱり鏡味さんは理想のモデルです。きしめんの魅力が十二分に表現されました」

「いや、その……」

「次は、かき揚げに行ってみてください」

言われるまま、桜海老のかき揚げに箸を伸ばした。

かき揚げといっても桜海老一尾一尾の形がはっきりとわかるくらい繋ぎの小麦粉が薄い。箸の先

に力を入れると、ほろほろと崩れてしまうほどだ。これ以上崩れないよう海老の塊をそっと箸で挟んで口に運んだ。

うわ。思わず眼を見張った。海老の風味がすごい。しかもこの食感に干したものではない。生の海老だ。噛むとしっかりとした味が口の中に広がってくる。最小限の衣をまとった殻の歯応えも素晴らしい。

「どうですか」

里央が訊いてくる。

「すごいです。これは桜海老の美味しさを最大限に引き出す食べかたですね」

「いい表現ですね。使わせてもらいます」

続けてきしめんとかき揚げを食べた。こうして交互に食べてみると、それぞれの味わいが引き立つような気がする。なるほど、天そばや天ぷらうどんといったメニューがあるのは、こういう理由があったのか。あらためて龍は理解した。

食べ終わった後、里央に再び感想を訊かれた。

龍は食べながら思ったことを素直に語った。

「面白いですね」

里央は言った。

「ただ単純に美味しいと思って食べているだけではない。ちゃんと頭の中で自分の感動を言語化しているんですね。さすがは医大生」

「いや……医学部に通っていることとはあんまり関係がないんじゃないですか。俺はただ、思っていることを言っただけで」

龍は反論したが、

「それ。思っていることを言葉にして言えるというのは、じつはかなり難しいことなんですよ。鏡味さんの食レポ、かなり好感度が高くなると思います。ああ、いい人材を見つけたなあ。鏡味さんはわたしにないものがあるから」

「ないもの？」

「知性と感性です。どちらもわたしには欠けているから」

「俺にだってそんな大層なもの、ないですよ。あんまり買いかぶらないでください」

「買いかぶってなんかいませんよ。本当に羨ましうらやし

いんです。わたしは……」

不意に里央が言葉を途切れさせた。

「……さっき、わたしが感情移入しすぎてるって  
言いましたよね」

「しすぎてる、とは言ってませんけど」

「でも指摘されるくらいには感情移入してるって  
ことでしょ。いつもそうなんです。気持ちばかり  
先走ってしまう。それで失敗することが多いんで  
すよね。子供の頃からそうでした。すぐにカッと  
なって喧嘩けんかしたり、言わなくてもいいことを言っ  
て相手を怒らせたり。これでもかなり自重するよ  
うになったんですけど、それでもときどき、余計  
なトラブルを起こしたりする」

ちよつと面倒なひとなのかな、と龍は身構えた。  
その様子に気付いたのか、里央はふっ、と笑みを  
洩らす。

「大丈夫、鏡味さんには多分、怒ったりすること  
はないと思いますから」

「どうして？」

「そういうタイプのひとだから。こうして話して

いてもわたしの『逆むけ』に引っかからない感じだから」

「さかむけ？ 何ですか」

「ほら、爪つめの際の皮がめくられて痛くなるやつです」

「ああ、ささくれのことですか。でも、それが？」

「人間の心には、気付かないところに逆むけができてると思うんです。そして、そこに触れられるとビビビって反応してしまう。誰かが言った何気ない言葉とか態度とか、そんなものが沁しみるんです。さつき、きしめんが好きかって訊きましたよね。わたし、きしめん好きです。でもそれは食べ物としてのきしめんだけでなくて、それにまつわる思い出とかも含めて好きなんです。でも、そのことを他のひとに指摘へそされたら、ちょっと臍へそを曲げてたかもしれません。わたしの心の一番デリケートな部分ですから」

きしめんがデリケートな部分なのか。龍にはやはり、よくわからない。

「あんまりきしめんの話はしないほうがいいんで

すか」

「いえいえ、それでは取材になりません。わたしはあえてきしめんのことを記事にしようと思ったんですから、どんだん話をしましょう。なにかきしめんについて面白い話題ってあります?」

「そう言われても……」

龍は困惑する。きしめんについて語るべきことなど、何もない。

そのとき、ふと喫茶ユトリ口で聞いた話を思い出した。

「そういえば、この前ちょっと変わった話を聞いたんですけど」

「どんな?」

促され、龍は美和子から聞かされた話を、そのまま里央に伝えた。

「茹でたきしめんをごみ箱に? どうしてそんなことをしたんですか」

「わからないです。俺もそれだけしか聞いてないんで。何か理由があって、そういうことをしたんでしょうけど」

「それ、なんてお店ですか」

「えっと……たしか、つぼうち屋って名前だったと聞きました。でも六年前に火事で焼けちゃったそうですけど」

「つぼうちや……」

里央の表情が変わった。

「何か？」

「いえ……じゃあ、今日はこんなところで。記事がまとまったら、また連絡します」

そう言うと彼女はそそくさと立ち上がり、さつさと勘定を済ませると、店を出て行ってしまった。

残された龍は、いささか呆然ぼうぜんとしてしまった。

何だ？ 何があった？ どうしてあのひとは、急に態度を変えていなくなってしまったんだ？

もしかして、自分の言葉が彼女の「逆むけ」とやらを刺激してしまったのだろうか。でも、いったい何が？

龍はただ、里央が出ていった出入口を見つめればかりだった。